

本

『自然の観察』



(A君作)

先日の土曜日、A君にさそわれ、クワガタとりに出かけた。これまでに、A君のクワガタとりへの誘いは数回であった。「先生、クワガタがいっぱいあるところ見つけたんや。いこうや」「ウン、どこや。」「それは言われへん。」「行ったらわかるかな。」「そんなん言わんと教えてくれや。」「あかん、一緒に行こうや。」「そうか、ウン、そんでさあ……」二人の会話が数回つづいた。ボクも彼のひつこさにまけて、シブシブ歩いた。彼は現地に着くと、すばやく、数ひきのクワガタをみつけた。そのみごとさにおどろいていると、彼のゴトボがとぶ。「先生おにしよるんや。はよとらんや。」「え、ああ」「どこにおるんや。」「先生おんも知らんわんや。木の下や。その葉っぱどけてんや。いっぱいあるやろ。」「あかん、あかん先生、木は、クヌギの木や。ドンゴリの木の下やなげんとあかん」と、このクワガタ博士の説明は続く。彼がけっして、学校、授業のな



「A君のかいた絵」

藤沢 文男 著 新生堂版
A5判、P158 巻/200

がたをみつけてしま、たのである。

この『自然の観察』のなかにはこのA君のようなる子どもを教室の主人公にするような場をつくる実践の在途がのべてある。う、各地の、小中高(このごろ高校の実践もあるらしい、千葉)校でおこなわれている「かわりだね、はしりもの」の実践には、張学平のきものがある。

著者は言う、「西洋家はジャガイモを植えるさ」と、そして、教師に言う「自然に触れるということは、理科教育として重要なだけでなく、ヒトがヒトとして育つために種の蓄積のために重要なことである。困難がどれだけ強く横たわっていても、最低限の仕事として子どもを自然物の中に連れ出さねばならぬ」と。

自然への近づき方として、具体的な方法が、このあとのページにある。教師自身が、自然とつきあっていくのにとて、勇気を与えてくれる本である。

かでは見せぬ表情である。クワガタ4~5ひきみつける間に、A君は、40ひき以上のクワ